サヨナラ
ホームラン

3月28日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月28日のおはなし「サヨナラホームラン」

　秋の日は釣瓶落としなんてことを申しますが、こう、見ておりますと、「ああずいぶんと日がかたぶいたな」なんて思う間もなくずんずん動いていくのが見えるようなあんばいで、あれよあれよと沈んでいく。その後は空を真っ赤に染め上げてやがてだんだん藍色や群青色のトバリがおりてくる。トバリってえと、イバリと響きが似てるけどずいぶん違いますな。トバリは、上からちょいとつるして目を遮るタレギヌ、イバリは雪隠でもってじょろじょろやるやつで、そんなものが夜になるたび降りてきたんじゃかなわない。

　夜ンなってあたりがすっかり暗くなると、この時分は窓を開けて夕餉をいただいたり、家族で野球観戦なんってのもあるんでしょうな、贔屓の選手がヒットを打ったり、贔屓のチームが点を入れたりするってえと、あっちの家やこっちの家から「わあっ」てなもんで歓声が上がる。別なチームが点を入れるてえとさっきのとは違う家から拍手が聞こえたりする。

「ああ、だから狭間さんと猪瀬さんは仲が悪いんだ」

なんてわかっちゃったりする。「うわあ！　ぎゃあ！　いやん、いやああん、すごい！　すごおおい！」なんて女の人の絶叫が聞こえてくるんで、「へへ、こいつぁどうも早い時間からいろっぽいことがおっ始まりましたか」なんて耳を澄ますとなんのことはない。贔屓のチームがサヨナラホームランで逆転勝ちしたなんてことだったりしますな。なんかこう、だまされたようなようなね、釈然としませんな、あれは。近所迷惑だ。

　あくる朝ンなって集会所に三々五々とご隠居さんたちが集まって来る。

「こりゃどうも猪瀬さん、今日もいい天気ですな」
「いっとう最初に、やなのが来やがった」
「え？　なんか言いましたか？」
「おや狭間さん、これは気づきませんでした」
「またまた。何をなさってたんで？」
「見ての通り新聞を読んでました」
「そんなあなた、急に新聞広げたりして。おや、試合の結果でも見てましたか」
「興味ないですな」
「ん？　それぁ、今日の新聞じゃない。昨日の朝刊ですぜ。夕べの試合は載ってません」
「ちょうどいいや」
「しかし、夕べの試合はすごかったですね」
「そうですか」
「試合はもうワンサイドで、どうみてもキムコ・ジャイアンツの圧勝ペースで」

「ははあ」
「さすが猪瀬さんの応援するキムコはてえしたもんだ。盤石だ。隙がない。焼きもまわってない。まとめて言えばスキヤキがない、なんてことを思いながら見てましたよ」
「くだらねえ」
「それがあなた、何があったんでしょうな。9回の裏ンなって、ね。スマトラ・タイガースがあんな風に大逆転するなんてね。人生何が起こるかわかりませんね」
「何が人生だ。陰気臭え」
「何ですって？」
「いえこっちの話」
「猪瀬さん、あれぁ、あの9回裏のメイクドラマ、どういうことだったんでげしょうな」
「わかりませんな」
「またまた。あたしゃ猪瀬さんに教えを乞おうって思って来たんすよ」
「何のことやら。何しろ見てなかったから」
「またまたまた。聞こえてましたよ。4回の猛攻のところで『よし！』って叫んだり、6回キムコの打者が一巡したところでご家族みなさんで万歳三唱してたのとか」
「知りませんな、そんなこと」
「ちゃーんと聞こえてたんすから。7回の2者残塁で『あああ！』ってため息ついたり」
「見てませんから。うちは家族で教育テレビ見てましたから」
「は？」
「クロード・レヴィ＝ストロース、『悲しき熱帯』の時代っていうね、知的視聴者のための教養番組を見ておりました」
「『よし！』とか叫んで？」
「レヴィ＝ストロースがブラジル行きを決めたところですかな」
「ご家族みんなで万歳三唱して？」
「アメリカに亡命できたところですな」
「あのため息は？」
「教授選に2度目も落選した時でしょうな」

　猪瀬さんもまあ、口から出任せにぺらぺらとよく言えたもんで。ただそうなると狭間さんもそうそういい顔ばかりはしてられない。

「やいやいやい。黙って聞いてりゃ適当なこと並べ立てやがって、ざけんじゃねえやい！　こちとらおたくが一家揃ってしけた雁首揃えてテレビにへばりついて野球観戦してたことは知ってんだ！　ふだんさんざんスマトラの悪口ふきまくっておいて、都合が悪くなると知らぬ存ぜぬだ？　そんなこたあお天道様が許してもおいらが許さねえ。正直にキリキリと負けを認めたらどうだい」
「狭間さんよ」

「なんでえ！」
「そんなに怒鳴らなくても、あたしぁ大人しく負けを認めてますよ」
「あんだと？」
「ごらんなさい。そのゴミ箱の中を」
「ん？　なんですこれは。あれあれ。新聞紙がビリビリに引き裂かれて。あ！　こいつぁ、今朝の朝刊じゃないすか」
「夕べの試合結果を見てあんまり頭にきたから破いちゃいました。負けは認めてますよ」
「あらあらダメじゃないすか集会所の新聞をこんなことしちゃ」
「反省してます。でもま、年寄り同士、仲良くやりましょうや。水本さんも深川さんもキムコファンです。陰気臭え話はナシってことで」

　狭間さんがゴミ箱からひっぱりだした新聞のきれはしがひらひらと落ちる。それを猪瀬さんが拾いあげて見出しを読む。

「おや狭間さん、これぁ穏やかじゃないことが書いてある」
「なんです」
「スマトラ・タイガースのファンがキムコのピッチャーの目にレーザービームを当てて妨害していたって」
「な？」
「ああ。9回のタカハシ投手の突然の乱調。そういうことだったのか！」
「へえ？」
「狭間さん、こいつぁ聞き捨て、いやさ読み捨てなりませんな。いったいどういうこってす？　このスマトラファンの卑怯なことといったら」
「ち、ち、ちょいと見せておくんなせえ」
「ほら！」
「えーと、どれどれ『前田に続け！　続々卒業宣言……』」
「裏！　裏！　裏！　狭間さん、こいつはひとつ、みんなの前できっちりと」
「パク！」
「あ！　食べちまいやがった！　な！　何しやがる。とんでもねえやつだ」
「んぐんぐごっくん！　はあ」
「ふてえ野郎だ。おめえがこの場で隠したってそんなもなあ」
「猪瀬さん、おいらはわかった。この話はよしやしょう」
「なんだと？」
「いま食べてわかったんだけど、この話は、あなたの言う通り、インキ臭え」

　おあとがよろしいようで。

（「サヨナラホームラン, レヴィ＝ストロース, 政令指定都市」ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

サヨナラホームラン

http://p.booklog.jp/book/46705

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/46705

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/46705

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.